たい

視標　緊急事態宣言再発令

「小さな物語」大切に
ワクチンで集団免疫を

長崎大熱帯医学研究所教授
山本　太郎氏

やまもと・たろう　1964年広島県生まれ。長崎大卒。アフリカや中米で感染症対策に従事。専門は国際保健学、熱帯感染症学。

新型コロナウイルスの感染者の増加が止まらない状況が続く。政府は首都圏に続いて各地の都市圏で緊急事態宣言の再発令に踏み切った。これまでの状況を振り返り、これからの課題を展望したい。

過去1年間の日本の新型コロナ対策を振り返ると、人口当たりの死者数は欧米と比較して少なく、全体としては成功している。何よりもこれまで極端な医療崩壊を起こすことなく、死者数を抑えることができた点は高く評価できる。ただし、これからが正念場だ。

一方、リスクを巡る政府のコミュニケーションには改善すべき点もある。「感染拡大を防げ」というメッセージを単純に出すだけでは、感染を抑え続けることは難しい。その先に何を目指すのか、私たちは今どこにいるのか、ロードマップを示すことが必要だ。

目指すべきは医療崩壊を防ぎ、経済的・社会的に困窮する人の生活を守る中で、流行を終息に向かわせるための集団免疫を社会全体で獲得することだと考える。その目標に向けて私たちは今どこにいるのか。走っているのは400㍍走なのか、5㌔走なのか、42㌔のマラソンなのか。今いる地点が序盤なのか中盤なのか。それが分かれば走り方も、心構えも違ってくる。

理論的に言えば集団免疫は、自然感染かワクチン接種のどちらか、あるいはその両方によって達成される。わずかな期間で新型コロナのワクチンが開発され、いよいよ日本でも接種が始まる見通しだ。これは一つの希望になる。

社会全体で集団免疫を目指すとしても、忘れてはいけない重要なことがある。「小さくても個別の大切な物語」の存在だ。

今私たちの周りでは、新型コロナを巡る二つの物語が同時に進んでいる。一つはウイルスとの共生、社会経済との両立、集団免疫の獲得という「大きな物語」。もう一つは一人一人の「小さな物語」だ。例えば、祖母や祖父などの近親者が感染して亡くなった人がいる。社会からみれば10万人に1人、100万人に1人の死であっても、家族にとっては大切でかけがえのない1人だ。こうした個別の物語に寄り添いたい。

同じことはワクチン接種についても言える。副作用がないワクチンは存在しない。10万人に1人、100万人に1人というわずかな割合でも起きうることは覚悟しておかなければならない。それでも私たちがワクチンを受容する理由は、それがもたらす利益が、個人においても社会においても、副作用の害を上回ると考えるからだ。

特にワクチンが有効な場合は、接種がもたらす社会的利益は大きい。それによって短い期間で集団免疫を獲得できるからだ。だがそうした物語のどこかに、副作用によって被害を受ける人の大切な物語が存在する。そのことを私たちは忘れてはならない。

「悲しみは消えない」と言う人に、告げる適切な言葉はない。それでも私たちは、それを乗り越えて前に進んでいくしかない。困難を乗り越えてよい社会をつくることだけが、その答えになる。悲しみをしっかりと心の中に抱きしめながら。